

- I. 胃集検全国集計
- II. 大腸集検全国集計
- III. 食道集検および肝胆膵集検全国集計

日本消化器集団検診学会全国集計委員会

久道 茂¹⁾・土井偉譽²⁾・岩崎政明³⁾
有末太郎⁴⁾・山田達哉⁵⁾・吉川邦生⁶⁾
北 昭一⁷⁾・古賀 充⁸⁾・小野良樹⁹⁾
北條慶一¹⁰⁾

=委員会報告=

I. 胃集検全国集計

II. 大腸集検全国集計

III. 食道集検および肝胆膵集検全国集計

日本消化器集団検診学会全国集計委員会

久道 茂¹⁾・土井偉誉²⁾・岩崎政明³⁾有末太郎⁴⁾・山田達哉⁵⁾・吉川邦生⁶⁾北 昭一⁷⁾・古賀 充⁸⁾・小野良樹⁹⁾北條慶一¹⁰⁾

はじめに

全国集計委員会が担当する全国集計は、今回でその5回目にあたる。昭和62年度の調査は、胃集検、食道集検および肝胆膵集検については前年度とほぼ同様の方法で行ったが、大腸集検については、新たに調査項目の内容を充実し、胃集検のそれとほぼ同様の詳細な調査を行ったことが特徴である。昭和63年11月初め、全国の検診機関に調査票を送り、平成元年1月末日を締切とした。

I 胃集検全国集計成績

1. 集検実施機関の区分と集検総数

検診機関の区分では、追跡調査や検診の統計を最もよく行っているI群が、間接集検機関では292カ所中250(85.6%)で、直接集検では93カ所中77(82.8%)である(表1)。

昭和62年度の総数は5,157,778人で、発見胃癌実数は6,661人(0.13%)、精検受診率が100%とした場合の推定数は8,779人(0.17%)であった(表2)。胃集検の全国集計数の年次推移は図1の通りで、62年

度の受診者総数は約516万人で、前年度の503万人と比べて、約12万人の増加になっている(図1)。

2. 撮影装置と撮影方法

間接X線装置の使用状況をみると、全体の726台のうち、車検診と施設検診とは異なるが、あわせて659台、90.8%は100mm間接を用いており、前年度の85.4%と比べると増加している。

また、I.I.間接は665台で、全体の91.6%を占めており、100mm間接のI.I.方式がほぼ定着している(表3)。

胃X線撮影法について検診機関数を分母にしてみると、撮影枚数は間接集検では5枚が0.3%、6枚が27.4%で、7枚以上が72.3%で、学会の勧告した標準撮影枚数がかなり定着している(図2)。発泡剤の使用は、間接、直接集検ともにほとんどの機関が(図3)、また、バリウムの濃度と量については、従来と同様、間接集検では、100~119%の200~249mlが、直接集検では、120%以上の200ml以上が大部分を占めている(図4, 5)。下剤の使用は、間接集検が91.4%、直接集検で96.8%となっている(図6)。

撮影者については、間接集検では、医師が撮影する機関は5.1%、技師がおこなうものは86.0%、両者で撮影するもの3.4%であった。直接集検では医師が17.2%、技師は62.4%、両者が19.4%となっている(図7)。

3. 稼動状況と検診料

間接集検の稼動状況と検診料は、一台当りの年間稼動日数は車検診で平均141~148日、施設検診では123~162日であった。一日当りの検診数は車検診で平均38~44人、施設検診で22~46人であった。検診料金は車検診で平均3,048~3,552円、施設検診で3,379~4,682円であった(表4)。

-
- 1) 東北大学 公衆衛生学
 - 2) 岐阜大学 放射線科
 - 3) P L 東京健康管理センター
 - 4) 北海道対がん協会 検診センター
 - 5) 国立がんセンター
 - 6) 長浜赤十字病院 消化器科
 - 7) 川崎医科大学 保健医療学
 - 8) 九州がんセンター
 - 9) 日本大学 内科
 - 10) 国立がんセンター 外科

表 1 胃集検全国集計対象機関の区分 (62年度)

	機 関 数	
	間接集検 ¹⁾	直接集検 ²⁾
I 群 性・年齢別に受診者、要精検者、精検受診者、発見胃癌患者が把握され、且つ癌患者の個人票の揃っているもの	250	77
II 群 性・年齢別に集計されていないもの	29	8
III 群 集検数のみ判明するもの	13	8
計	292	93

(注) : 1) 間接 X 線撮影による胃集検のこと

2) 直接 X 線撮影による胃集検のこと

表 2 対象機関別受診者数と発見胃癌数 (62年度, 間接・直接の合計)

区 分	受診者数	発見胃癌数 (実数)	(推定数)	率
I 群	4,472,383	6,150	(7,915)	0.14%
II 群	349,522	378	(547)	0.11%
III 群	335,873	133	(317)	0.09%
総 計	5,157,778	6,661	(8,779)	0.13%(0.17%)

※ 推定数は各群の精検受診率 (I 群77.7%, II 群69.1%, III 群41.9%) が 100 %とした場合、未受診者も受診者と同じ率で、胃癌が発見されるものとして算出したもの。

表 3 間接 X 線装置の使用状況とフィルムサイズ (62年度)

		車 検 診		施 設 検 診		計
		70MM	100MM	70MM	100MM	
I 群	I. I. 間 接	18台	446台	8台	111台	583台
	その他	29台	18台	4台	3台	54台
	小 計	47台	464台	12台	114台	637台
II 群	I. I. 間 接	3台	40台	1台	13台	57台
	その他	2台	3台	1台	0台	6台
	小 計	5台	43台	2台	13台	63台
III 群	I. I. 間 接	1台	20台	0台	4台	25台
	小 計	0台	1台	0台	0台	1台
	その他	1台	21台	0台	4台	26台
計(台)		53台	528台	14台	131台	726台

直接集検の場合、施設検診だけになるが、一台当りの年間稼働日数、一台一日当りの検診数および一人当りの検診料金は各群でばらつきがある (表 5)。

4. 読影状況

読影状況についてみると、検診機関に所属する医師で読影している機関は間接で68.2%、直接で84.9%であった (図 8)。ダブルチェックは、間接集検で79.1%の機関がおこなっており、読影委員会を設置

している機関は46.6%であった (図 9, 10)。認定医の有無についてみると、間接集検をおこなっている検診機関では、55.5%、直接集検の機関では、51.6%に認定医がいるという状況であった (図 11)。

5. 精検以後の管理

精検以後の管理の仕方について、間接集検の場合を述べると、精検の実施方法では、自機関または一部他機関に委託しているもの72.2%、22.9%が他に

図1 胃集検の年度別集計対象数の推移

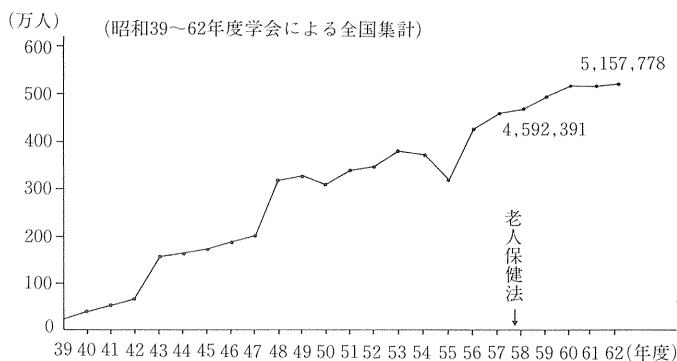


表4 間接集検の稼動状況と検診料 (62年度)

		車 検 診	施設検診
一台当りの 年間稼動日数	I 群	141 日	162 日
	II 群	142 日	123 日
	III 群	148 日	129 日
一台一日当り の 検 診 数	I 群	44 人	27 人
	II 群	38 人	46 人
	III 群	38 人	22 人
一人当りの 検 診 料 金	I 群	3,150 円	3,379 円
	II 群	3,552 円	4,455 円
	III 群	3,048 円	4,682 円

(平均値)

表5 直接集検の稼動状況と検診料 (62年度)

一台当りの年間 稼動日数	I 群	183日
	II 群	188日
	III 群	217日
一台一日当り の 検 診 数	I 群	19人
	II 群	13人
	III 群	26人
一人 当 り の 検 診 料 金	I 群	9,590円
	II 群	9,171円
	III 群	12,957円

(平均値)

図2 胃 X 線撮影法 (62年度)

a. 撮影枚数

〈間接撮影〉 n (機関数) = 292

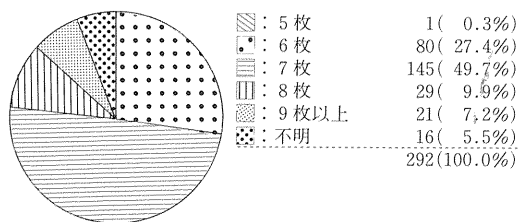
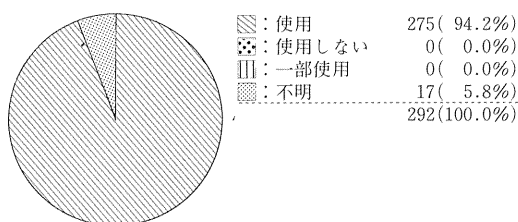


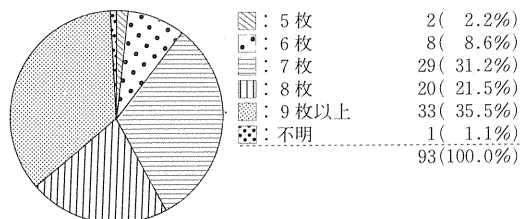
図3

b. 発泡剤の使用

〈間接撮影〉 n = 292



〈直接撮影〉 n = 93



〈直接撮影〉 n = 93

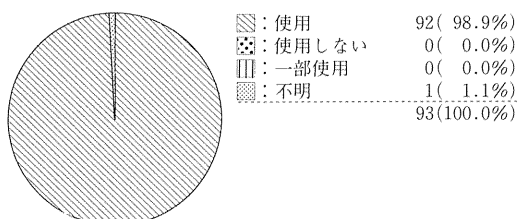
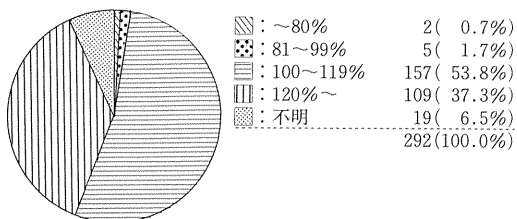


図 4

c. バリウムの濃度

〈間接撮影〉 n=292



〈直接撮影〉 n=93

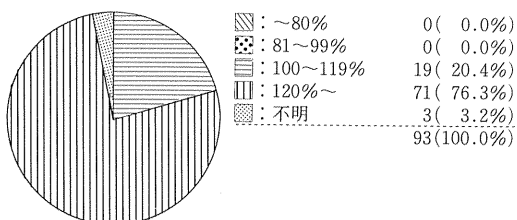
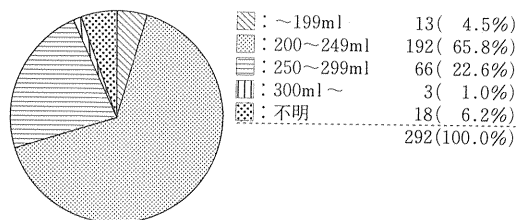


図 5

d. バリウム量

〈間接撮影〉 n=292



〈直接撮影〉 n=93

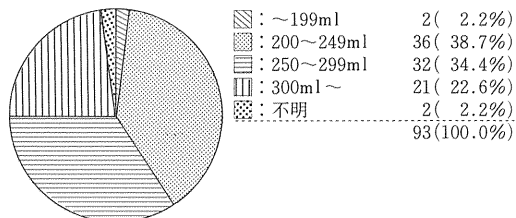
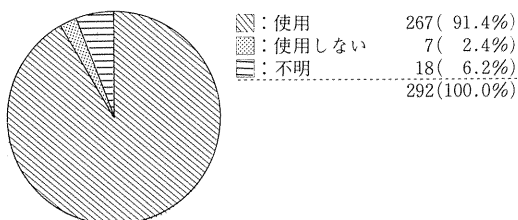


図 6

e. 下剤の使用

〈間接撮影〉 n=292



〈直接撮影〉 n=93

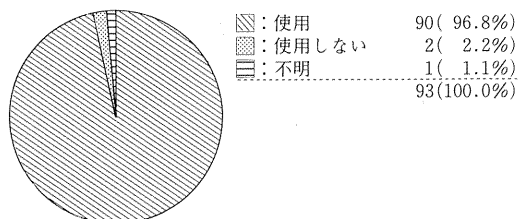
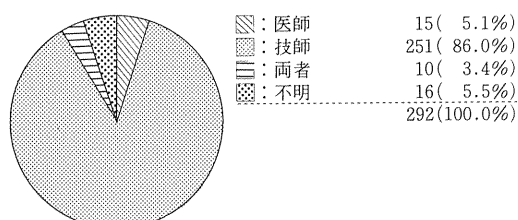


図 7

f. 撮影者

〈間接撮影〉 n=292



〈直接撮影〉 n=93

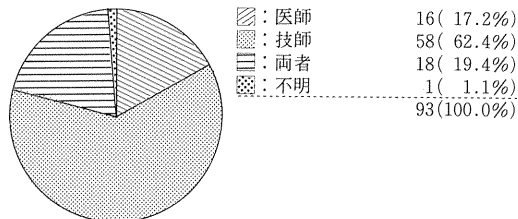
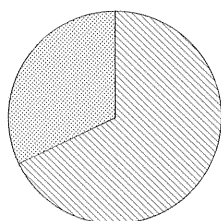


図 8 読影状況 (昭和62年度)

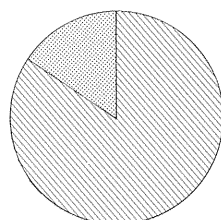
a. 読影者

〈間接集検〉 n=292



自機関	199 (68.2%)
委託	93 (31.8%)
合計	292 (100.0%)

〈直接集検〉 n=93

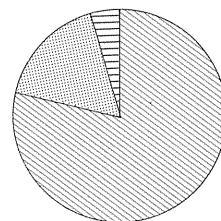


自機関	79 (84.9%)
委託	14 (15.1%)
合計	93 (100.0%)

図 9

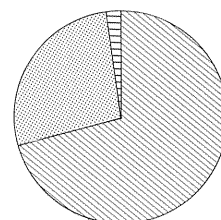
b. ダブルチェック

〈間接集検〉 n=292



している	231 (79.1%)
していない	49 (16.8%)
不明	12 (4.1%)
合計	292 (100.0%)

〈直接集検〉 n=93

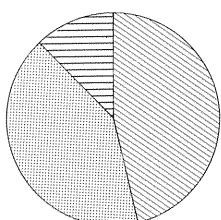


している	66 (71.0%)
していない	25 (26.9%)
不明	2 (2.2%)
合計	93 (100.0%)

図10

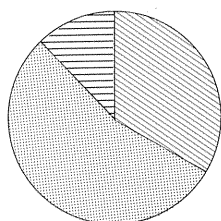
c. 読影委員会

〈間接集検〉 n=292



あり	136 (46.6%)
なし	120 (41.1%)
不明	36 (12.3%)
合計	292 (100.0%)

〈直接集検〉 n=93

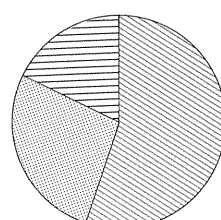


あり	31 (33.3%)
なし	51 (54.8%)
不明	11 (11.8%)
合計	93 (100.0%)

図11

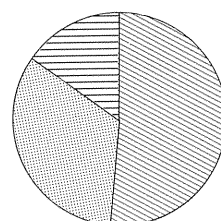
d. 認定医

〈間接集検〉 n=292



いる	162 (55.5%)
いない	78 (26.7%)
不明	52 (17.8%)
合計	292 (100.0%)

〈直接集検〉 n=93

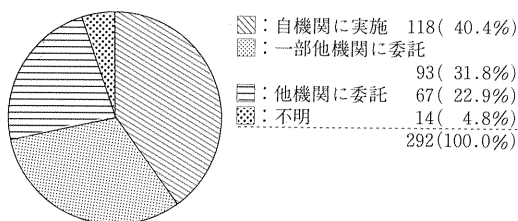


いる	48 (51.6%)
いない	31 (33.3%)
不明	14 (15.1%)
合計	93 (100.0%)

図12 精検以後の管理について (62年度)

a. 精検の実施方法

〈間接集検〉 n=292



〈直接集検〉 n=93

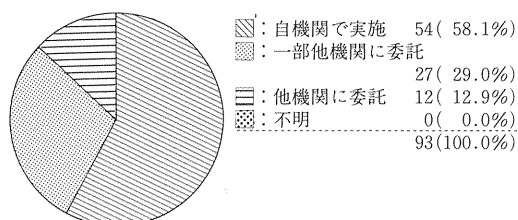
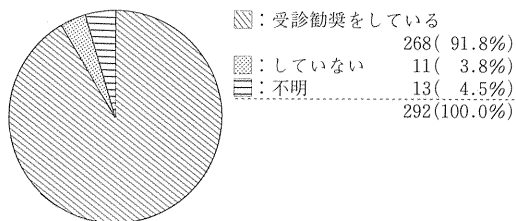


図13

b. 要精検者に対する受診勧奨

〈間接集検〉 n=292



〈直接集検〉 n=93

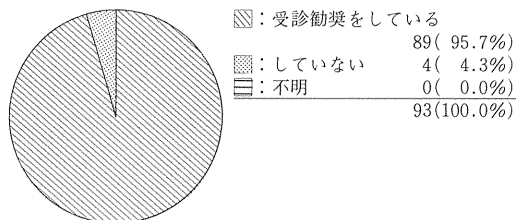
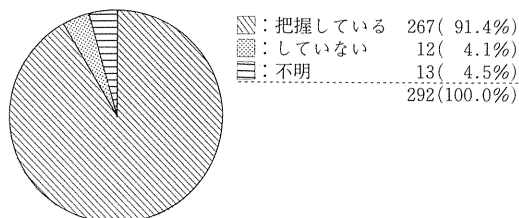


図14

c. 精検結果の把握

〈間接集検〉 n=292



〈直接集検〉 n=93

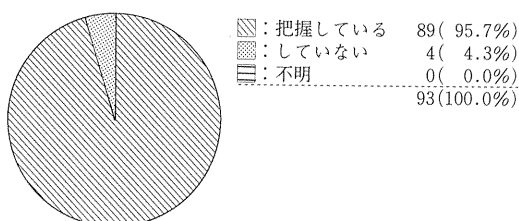
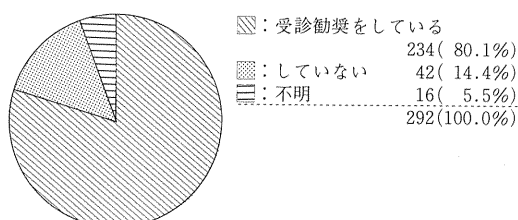


図15

d. 精検未受診者への受診勧奨

〈間接集検〉 n=292



〈直接集検〉 n=93

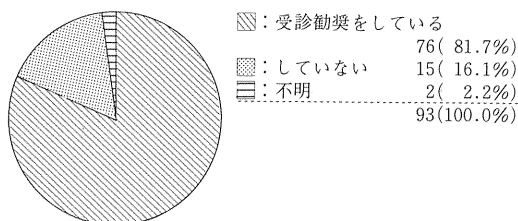
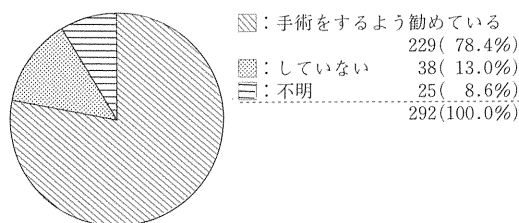


図16

e. 発見癌患者の管理

〈間接集検〉 n=292



〈直接集検〉 n=93

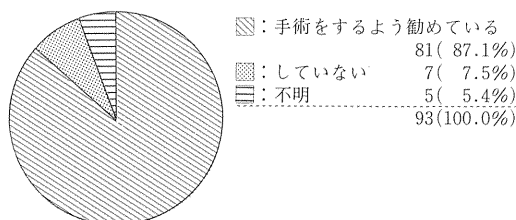
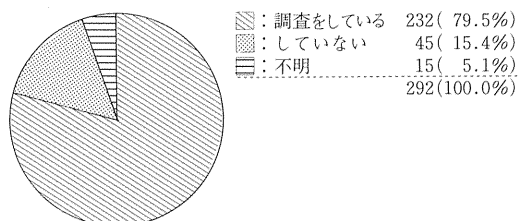


図17

f. 手術結果の調査

〈間接集検〉 n=292



〈直接集検〉 n=93

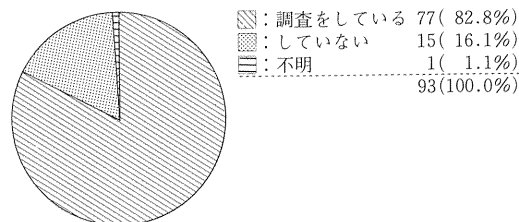
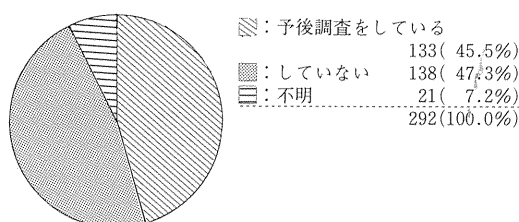


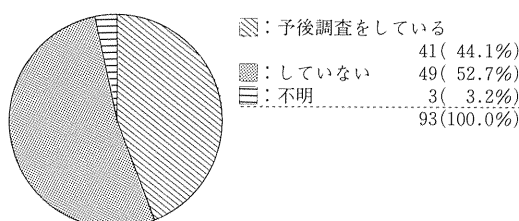
図18

g. 発見癌患者の予後調査

〈間接集検〉 n=292



〈直接集検〉 n=93



委託という状況である(図12)。要精検者に対する受診勧奨をしているのは91.8%(図13), 精検結果の把握をきちんとしているところは91.4%(図14), 精検未受診者への受診勧奨をおこなっているのは80.1%(図15), 発見胃癌患者への手術の勧奨を積極的に進めているのは78.4%(図16), 手術結果の調査をしているところは79.5%(図17), またその予後調査をしているところは45.5%となっている(図18)。これらの数値は年々高くなっている傾向にあり, 精度管理の面から好ましい状況といえる。

直接集検の場合は, 発見患者への手術の勧奨をしているところが87.1%, 手術結果の調査をしているところは82.8%, 患者の予後調査をしているところは44.1%であった(図16~18)。

6. 地域・職域検診別の集検成績

62年度の受診者総数, 5,157,778人を地域検診と職域検診別に分けて検討すると, 地域検診が3,262,090人, 職域検診が1,895,688人で前者が約63.2%を占める。地域検診と職域検診を比較すると要精検率は13.8%と13.9%で差はないが, 精検受診率は各々82.6%と63.6%で両者に差があり, 職域検診の一次検診後の管理や追跡調査にまだ不備が感じられる。その結果, 後述するように, 職域検診では39歳以下の若年層の受診者の占める割合が多いこととあいまって, 胃癌発見率が0.07%, 地域検診の0.16%の半分以下

という数値である。これは前年とほぼ同様である。早期胃癌の割合は、地域の53.9%に対し、職域は44.9%となっている(表6)。また、地域と職域検診を間接集検、直接集検別に検討したものを表7, 8に示した(表7, 8)。

7. 性・年齢階級別受診者数および疾患発見数

地域、職域、直接、間接の合計の、性・年齢階級別の受診者数は、表9, 10, 図19に示す。男では40代前半に、女では50代後半にそのピークがある。胃

癌発見率は男で0.18%, 女で0.09%, 前者が2倍の発見率であるが、胃ポリープは男が0.58%, 女が0.85%で、逆に女性の方が1.5倍発見率が高い。胃潰瘍は男が1.82%, 女が0.60%で、前者が3.1倍である(表9, 10)。また、胃集検の対象年齢が40歳以上となっているのにもかかわらず、39歳以下の受診者は男女あわせて54万人おり、これは全受診者数の13%を占めている。

これを地域検診でみると、39歳以下は男女あわせ

表6 地域・職域検診別の集検成績

(I, II, III群, 62年度)

(直接・間接合計)

	地域検診	職域検診	計
検 診 数	3,262,090	1,895,688	5,157,778
要 精 検 者 数	449,444	265,367	714,811
要 精 検 率	13.8%	13.9%	13.9%
精検受診者数	371,213	168,806	540,019
精 検 受 診 率	82.6%	63.6%	75.5%
発 見 胃 癌 数	5,385	1,276	6,661
発 見 率	0.16%	0.07%	0.13%
早期胃癌の割合	53.9%	44.9%	52.1%

表7 間接集検の地域・職域別成績 (I, II, III群, 62年度)

	地域検診	職域検診	計
検 診 数	3,128,503	1,636,172	4,764,675
要 精 検 者 数	430,553	224,921	655,474
要 精 検 率	13.8%	13.7%	13.8%
精検受診者数	358,735	144,985	503,720
精 検 受 診 率	83.3%	64.5%	76.8%
発 見 胃 癌 数	5,162	1,072	6,234
発 見 率	0.16%	0.07%	0.13%
早期胃癌の割合	53.7%	44.3%	51.9%

表8 直接集検の地域・職域別成績 (I, II, III群, 62年度)

	地域検診	職域検診	計
検 診 数	133,587	259,516	393,103
要 精 検 者 数	18,852	40,446	59,298
要 精 検 率	14.1%	15.6%	15.1%
精検受診者数	12,475	23,731	36,206
精 検 受 診 率	66.2%	58.7%	61.1%
発 見 胃 癌 数	223	202	425
発 見 率	0.17%	0.08%	0.11%
早期胃癌の割合	57.4%	54.9%	56.2%

表9 年齢別胃集検全国集計成績(62年度) 男性(直接, 間接, 地域, 職域集検合計)

	総 数	～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65～69	70～74	75～79	80～	70～*
A 集検受診者数	1,999,333	41,202	71,147	215,658	328,376	310,176	303,512	279,045	206,360	132,448	44,838	13,522	3,328	49,721
B 要精検者数	338,610	3,578	8,115	27,851	46,345	47,280	53,194	53,763	45,732	27,373	10,955	2,756	538	11,130
B / A %	16.94	8.68	11.41	12.91	14.11	15.24	17.53	19.27	22.16	20.67	24.43	20.38	16.17	22.38
C 精検受診者数	261,016	2,400	5,846	20,207	33,749	35,917	39,838	41,632	38,847	21,783	8,181	2,344	437	9,835
C / B %	77.08	67.08	72.04	72.55	72.82	75.97	74.89	77.44	84.94	79.58	74.68	85.05	81.23	88.36
D 胃癌	3,551	2	18	118	125	248	364	663	757	602	249	87	28	290
D / A %	0.18	0.00	0.03	0.05	0.04	0.08	0.12	0.24	0.37	0.45	0.56	0.64	0.84	0.58
うち早期癌	2,146	1	14	87	72	173	271	454	507	288	133	44	10	92
胃癌切除数	2,370	1	11	37	92	150	272	474	509	403	179	67	15	160
胃癌手術組織所見数	2,112	0	11	33	77	135	239	425	456	361	167	60	12	136
胃癌うたがい	199	0	2	3	8	20	23	55	37	30	12	1	0	8
胃ポリープ	11,607	33	89	440	896	1,347	1,789	1,999	2,035	1,417	617	189	45	711
胃潰瘍	36,449	205	656	2,604	4,711	5,228	5,754	6,186	5,487	2,956	1,014	290	49	1,309
十二指腸潰瘍	17,922	272	584	2,008	3,066	2,741	2,755	2,719	1,926	1,090	303	98	18	342
胃・十二指腸潰瘍	2,977	26	73	265	502	467	514	447	350	188	57	15	2	71
その他良性疾病	42,863	321	830	2,825	5,103	5,487	6,508	7,105	6,292	4,358	1,815	550	52	1,617
その他悪性疾病	677	2	15	100	77	74	103	125	74	57	3	1	0	46
異常なし	144,771	1,539	3,579	11,844	19,261	20,305	22,028	22,333	21,889	11,085	4,111	1,113	243	5,441

※ 70歳以上をさらに年齢区分をしていないもの。

表10 年齢別胃集検全国集計成績(62年度) 女性(直接, 間接, 地域, 職域集検合計)

	総 数	～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65～69	70～74	75～79	80～	70～*
A 集検受診者数	2,146,718	18,844	35,839	160,407	296,842	319,533	347,606	376,409	291,322	181,089	49,927	15,352	2,906	50,642
B 要精検者数	235,353	2,668	2,622	12,272	27,637	31,151	37,706	40,461	37,998	25,668	7,130	1,839	272	7,929
B / A %	10.96	14.16	7.32	7.65	9.31	9.75	10.85	10.75	13.04	14.17	14.28	11.98	9.36	15.66
C 精検受診者数	197,467	606	2,157	9,510	22,690	26,132	31,721	34,763	31,535	23,369	6,075	1,653	183	7,073
C / B %	83.90	22.71	82.27	77.49	82.10	83.89	84.13	85.92	82.99	91.04	85.20	89.89	67.28	89.20
D 胃癌	1,998	2	8	80	185	202	244	323	366	314	122	25	11	116
D / A %	0.09	0.01	0.02	0.05	0.06	0.06	0.07	0.09	0.13	0.17	0.24	0.16	0.38	0.23
うち早期癌	900	0	3	32	77	84	104	148	177	156	62	8	4	45
胃癌切除数	1,245	0	3	29	86	119	144	202	253	224	94	19	4	68
胃癌手術組織所見数	1,123	0	3	28	74	112	135	185	227	190	90	19	4	56
胃癌うたがい	101	0	0	3	9	9	12	12	27	14	6	3	0	6
胃ポリープ	18,277	13	85	481	1,341	1,807	2,773	3,444	3,682	2,689	805	202	31	924
胃潰瘍	12,782	29	129	589	1,390	1,628	2,095	2,209	1,979	1,563	436	155	14	566
十二指腸潰瘍	9,173	40	114	574	1,392	1,419	1,623	1,573	1,285	721	157	68	4	203
胃・十二指腸潰瘍	829	3	4	51	102	108	157	142	118	95	20	4	0	25
その他良性疾病	31,715	73	288	1,217	2,988	3,800	4,914	5,835	5,594	4,145	1,330	382	23	1,126
その他悪性疾病	422	5	8	21	39	49	56	82	78	40	2	0	0	42
異常なし	122,170	441	1,521	6,474	15,244	17,110	19,847	21,143	18,406	13,788	3,197	814	100	4,065

※ 70歳以上をさらに年齢区分をしていないもの。

て219,218人, 7.9%を占めている(図20)。職域検診での39歳以下は323,879人, 23.1%で前年度と同様, 約4人に1人は, 対象年齢以外の若年者の受診者で占められている(図21)。

8. 発見疾患の年次推移

表11は各胃疾患の発見率を経年的にあらわしたものであるが, 受診者総数Cの数値は, 性別, 5歳階級別に各疾患の発見数と頻度が算出可能なものを分母として算出したものである。表のうち, Aは発見実数, Bは要精検者が全員精検を受診した場合の推定

患者数で, B/Cは推定発見率となる。61年度の成績は, 胃癌は0.16%, 胃ポリープ0.90%, 胃潰瘍1.49%, 十二指腸潰瘍0.82%で, 前年度とほぼ同様の数値である(表11)。

9. 発見胃癌患者の追跡調査

1) 追跡調査率

発見胃癌の追跡調査成績では, 6,661名の胃癌のうち, 深達度や病理組織診断などのデータが得られた数(個人票の形で送られてきたもの)は5,891例, 追跡率88.4%である(表12)。

図19 性・年齢階級別受診者数 (62年度)

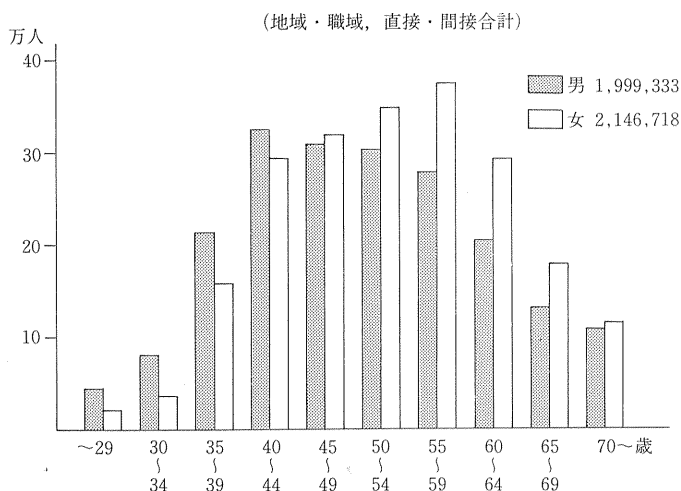
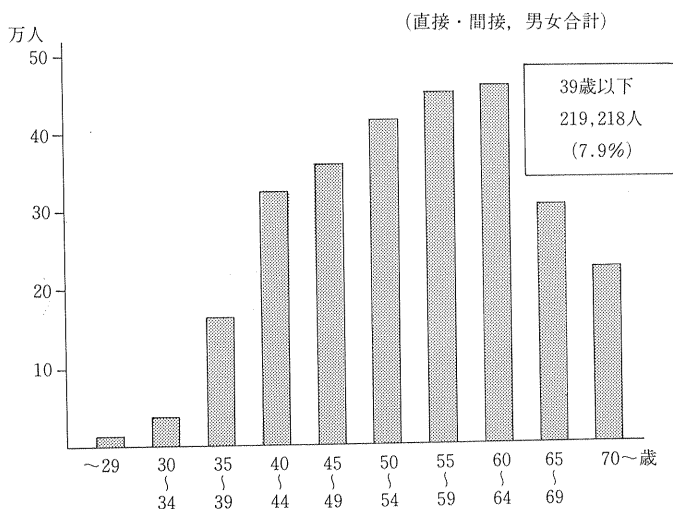


図20 地域検診の年齢階級別受診者数 (62年度)



2) 手術成績

手術に関する成績では, 5,891例中手術適応となったもの5,455名, 92.6%, このうち手術をしたもの5,301名で97.2%の手術率, また, 手術の種類は治癒切除が4,662名で87.9%であった(表13, 14)。

3) 占居部位

発見胃癌の占居部位は, CMA区分で, 多発癌も含めた病巣数でみると, Cが15.4%, Mが45.3%, Aが37.6%であった(表15)。壁在性でみると小弯(34.1%), 後壁が多く(27.4%), 前年度とほぼ同様である(表16)。

4) 大きさ

長径1 cm以下の小胃癌が10.7%, 1.1~2.0 cmが21.4%で, あわせて約32.1%となっている(表17)。

5) 切除胃癌の深達度別割合

切除胃癌の深達度別割合をみると, 5,129例のうち, m癌が33.8%, smが26.8%, あわせて60.6%で, 前年度の58.5%より幾分上昇している(表18)。

6) Stage分類

Stage Iは2,881例, 60.0%, Stage IIは15.9%, Stage IIIは15.5%, Stage IVは8.6%であった(表19)。

7) 肉眼分類

図21 職域検診の年齢階級別受診（62年度）

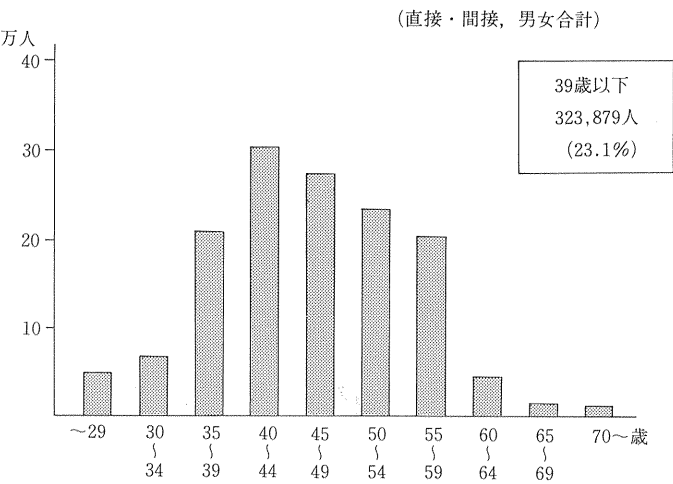


表11 胃集検による発見疾患とその頻度（年次推移）

胃疾患	年度	58	59	60	61	62
胃 癌	A	3,312	4,447	5,339	5,696	5,551
	B	4,632	5,663	6,827	7,088	6,947
	B / C	0.15	0.14	0.16	0.16	0.16
胃ポリープ	A	16,062	20,737	25,917	27,823	29,885
	B	22,464	26,406	33,142	34,605	37,403
	B / C	0.74	0.67	0.78	0.79	0.90
胃 潰 瘍	A	37,688	50,028	53,898	54,555	49,238
	B	52,710	63,706	68,923	67,854	61,625
	B / C	1.74	1.6	1.63	1.54	1.49
十二指腸潰瘍	A	18,971	26,028	27,014	26,782	27,095
	B	26,573	33,144	34,545	33,311	33,911
	B / C	0.88	0.84	0.81	0.76	0.82
被検者総数C*		3,028,787	3,969,578	4,241,103	4,402,145	4,146,051

※ 性別、5歳階級別に集計可能な受験者数を母数とした。

表12 発見胃癌の追跡調査成績（62年度 間接・直接）

年度	58	59	60	61	62
発見胃癌数	4,598	5,180	6,240	5,922	6,661
追跡胃癌数	3,896	4,343	4,708	5,353	5,891
追 跡 率 %	84.7	83.8	75.5	90.4	88.4

表13 手術の有無（62年度）（直＋間）

a) 手術適応

総 数	適 応	不 適 応	不明・回答なし
5,891 (100%)	5,455 (92.6)	126 (2.1)	310 (5.3)

b) 手 術

総 数	し た	せ ず	不明・回答なし
5,455 (100%)	5,301 (97.2)	69 (1.3)	85 (1.6)

表14 手術の有無 (62年度)

c) 手術の種類

総 数	治 療 切 除	非 治 療 切 除	吻 合 術	造 瘻	単 開 腹	そ の 他	不明・ 回答なし
5,301 (100%)	4,662 (87.9)	298 (5.6)	72 (1.4)	2 (0.04)	40 (0.8)	23 (0.43)	204 (3.8)

表16 発見胃癌の占居部位Ⅱ (62年度)

部 位	病 巣 数	%
小 彎	1,845	34.1
大 彎	694	12.8
前 壁	1,067	19.7
後 壁	1,484	27.4
全 周	291	5.4
多 発	28	0.5
合 計	5,409	100.0

表15 発見胃癌の占居部位Ⅰ (62年度) (間接+直)

部 位	病 巣 数	%
C	844	15.4
M	2,485	45.3
A	2,060	37.6
全 体	97	1.8
合 計	5,486	100.0

表17 発見胃癌の大きさ (62年度)

長 径 (cm)	例 数	%
～1.0	536	10.7
1.1～2.0	1,073	21.4
2.1～5.0	2,269	45.2
5.1～	1,141	22.7
合 計	5,019	100.0

表18 切除胃癌の深達度別頻度 (62年度) (間+直)

総 数	m	sm	pm	ss	s	si
5,129 (100.0%)	1,734 (33.8)	1,377 (26.8)	646 (12.6)	668 (13.0)	135 (2.6)	569 (11.1)

m + sm	3,111 (60.7)	pm	646 (12.6)	ss + s + si	1,372 (26.7)
--------	-----------------	----	---------------	-------------	-----------------

表19 Stage (62年度)

Stage	例 数	%
I	2,881	60.0
Ⅱ	765	15.9
Ⅲ	747	15.5
Ⅳ	412	8.6
計	4,805	100.0

表20 早期胃癌の肉眼分類 (昭和62年度)

肉 眼 分 類	例 数	%
I	175	5.3
Ⅱ a	369	11.2
Ⅱ b	53	1.6
Ⅱ c	1,852	56.2
Ⅲ	16	0.5
Ⅱ c + Ⅲ	247	7.5
Ⅲ + Ⅱ c	40	1.2
Ⅱ c + Ⅱ a	197	6.0
その他の組合せ	321	9.7
分類不能	23	0.7
合 計	3,293	100.0

従来と同様早期癌ではⅡ_c型が多く56.2%を占めている。進行癌では、Borrmann 4型が12.2%、早期癌、進行癌あわせた全胃癌に占める割合は4.8%であった (表20, 21)。

8) 胃癌症例の集検受診前歴

受診前歴の記載された切除胃癌4,570例について、集検受診歴区分でみると、初回発見例が全切除胃癌のうち35.1%を占め、1年前受診例、即ち2年連続受診で発見されたものが41.2%を占める。

各受診歴区分毎の切除胃癌に占める早期胃癌

の割合は図22の通りで、初回発見例が56.5%で最も低く、1年前受診群が65.7%で最も高い。さらに、2年前、3年前、4年前受診群の早期癌割合は各々63.4%、56.3%、56.9%となっている。また、初回発見群の数値に対する有意差

表21 進行胃癌の肉眼分類（昭和62年度）

肉 眼 分 類	例 数	%
Borr. 1	126	5.9
Borr. 2	678	31.6
Borr. 3	782	36.5
Borr. 4	261	12.2
分類不能	297	13.9
合 計	2,144	100.0

図22 発見胃癌例の集検受診歴と早期胃癌の頻度（62年度）

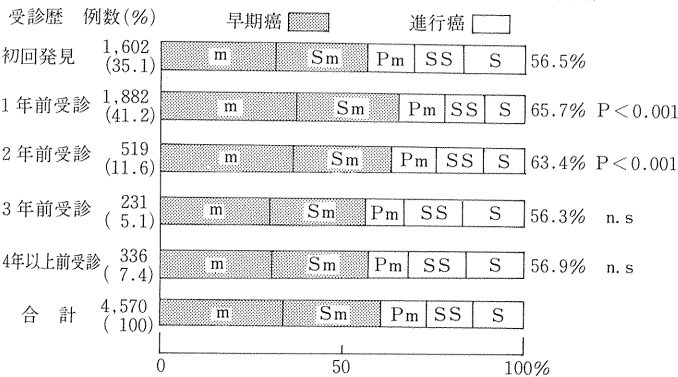


表22 内視鏡胃集検と全国集計成績（61年度）(1)

年間受検数区分	実施機関数	受 検 者 数	発 見 胃 癌	早期胃癌(%)
500以上	4	4,385	18	4(22.2%)
100～500	10	1,767	21	11(52.4%)
100以下	6	209	2	1(50.0%)
計	20	6,361	41	16(39.0%)

表23 内視鏡胃集検と全国集計成績（62年度）(2)

受診者総数	4,385人
男	2,594人 (59.2%)
女	1,791人 (40.8%)
発見疾患と発見率	
胃 癌	18名 (0.4%)
〔うち早期胃癌	4名 (22.2%)〕
胃潰瘍	215名 (4.9%)
胃ポリープ	155名 (3.5%)
食道疾患	20名 (0.5%)
〔うち食道癌0名〕	

(年間500人以上実施の4機関についての集計)

表24 II. 大腸集検全国集計対象機関の区分（昭和62年度）

		機関数
I 群	性・年齢別に受診者・要精検者・精検受診者・発見大腸癌患者が把握され、且つ癌患者の個人票の揃っているもの	33
II 群	性・年齢別に集計されていないもの	8
III 群	集検数のみ判明するもの	7
その他	集検数の記載がないが、実施方法等が判明するもの	10
	計	58

検定では、1%の危険率で有意なものは1年前および2年前受診群であった(図22)。

10. 内視鏡胃集検の全国集計成績

一次スクリーニングとして内視鏡を用いておこなっているいわゆる内視鏡胃集検は、前年度と同様にX線撮影法による胃集検のような受診者の性年齢区

分をした詳細な集検成績の回答は求めず簡単な集計にとどめた。

内視鏡胃集検をおこなっているのは、表22に示すように、全国で20機関で、受診者総数は6,361名、発見胃癌41名(0.64%)であるが、1つの検診機関で年間100名以下のところもあり、これらを集検と扱って妥当かどうかの問題もあり、昨年と同様に、年間500名以上の内視鏡による胃集検を行っている4カ所のもので集計した。このような条件で集計すると、内視鏡集検の受診者総数は4,385名、発見胃癌18名、発見率は0.4%である(表23)。

II 大腸集検全国集計

昭和62年度に実施された大腸集検の全国集計は胃集検と同じように詳細な調査を行った。今回の調査に返答をよせた機関は58カ所、対象区分は表24の通りで、この中には、大腸集検の実施方法などの返答はあったが、受診者数の記載のない10カ所の検診機関が含まれている(表24)。

1. 大腸検診の実施機関

大腸検診(ここでは、一般に集団検診といわれて

いない人間ドックや任意応募による検診も含まれたため、大腸検診と表現した)の実施機関は、すべて自機関で行っているところが49カ所(84.5%)であった(表25)。

2. 大腸検診の対象

大腸検診の受診対象は表26に示すように重複回答であるが、職域50%、地域住民48.3%、人間ドックが43.1%となっており、その他、任意応募者、団体(クラブ)等がある。集団検診の定義のことも含め、全国集計の対象をどうするか、今後の検討課題である(表26)。

受診者の対象年齢は、40歳以上とするものが48.3%、年齢を特に制限していないものが37.9%であった(表27)。

3. 大腸検診の実施方法

大腸検診の方法は、スクリーニング法を採用している機関が93.1%であった(表28)。

スクリーニング法の方法は、便潜血テストと問診を加えた方法が51.7%、便潜血だけが43.1%で、便潜血テストを用いているところはあわせて95%となる(表29)。

表25 大腸検診の実施方法(全国, 昭和62年)

I. 実施機関

すべて自機関	49 (84.5)
一部自, 一部他	5 (8.6)
すべて他機関	2 (3.4)
(回答なし)	2 (3.4)
検診機関数	58 (100%)

表28 大腸検診の方法(全国, 昭和62年)

I. Screening法か直接法か(重複回答)

Screening法	54 (93.1)
直接法	5 (8.6)
検診機関数	58 (100%)

表26 大腸検診の実施方法(全国, 昭和62年)

II. 受診者の対象(1)(重複回答)

地域	28 (48.3)
職域	29 (50.0)
団体(クラブ)	7 (12.1)
人間ドック	25 (43.1)
任意応募者	8 (13.8)
その他	1 (1.7)
検診機関数	58 (100%)

表29 大腸検診の方法(全国, 昭和62年)

II. Screening法の場合(1)(重複回答)

(1) 便潜血	25 (43.1)
(2) 問診(アンケート)	3 (5.2)
(3) 血清CEA	2 (3.4)
(4) 便潜血+問診	30 (51.7)
(5) 注腸X線	0 (0)
(6) その他	1 (1.7)
検診機関数	58 (100%)

表27 大腸検診の実施方法(全国, 昭和62年)

II. 受診者の対象(2)

40歳以上	28 (48.3)
年齢制限なし	22 (37.9)
その他	8 (13.8)
検診機関数	58 (100%)

表30 大腸検診の方法(全国, 昭和62年)

II. 便潜血 screeningの方法(2)

(1) 1日法	30 (51.7)
(2) 2日法	10 (17.2)
(3) 3日法	13 (22.4)
(4) その他	5 (8.6)
検診機関数	58 (100%)

便潜血テストによるスクリーニング法のうち、1日法は51.7%、3日法、22.4%、2日法が17.2%であった(表30)。

食事制限との関連では、食事制限をしないで一次スクリーニング法をとるところが60.3%、食事制限をしない一次スクリーニングと一次陽性者を食事制限の上の検便をする二次スクリーニングとの組合せ法を行っているところが25.9%であった(表31)。

便潜血テストのうち、生化学的方法を用いているところが24カ所、41.4%、免疫学的方法が45カ所、77.6%で、詳細は表32に示す(表32)。

表31 大腸検診の方法(全国, 昭和62年)

Ⅱ. 便潜血 screening の方法(3) (重複回答)

(1) 一次 screening (食事制限せず) + 二次 screening (一次陽性者食事制限の上検便)	15 (25.9)
(2) 一次 screening のみ(食事制限)	8 (13.8)
(3) (一次) screening (食事制限せず)	35 (60.3)
(4) そ の 他	3 (5.2)
検診機関数	58 (100%)

表32 大腸検診の方法(全国, 昭和62年)

Ⅱ. 便潜血 screening の方法(4) (重複回答)

(1) 生化学的方法	
(a) ヘモカルト	12 (20.7)
(b) シオノギB法	8 (13.8)
(c) FECA-TWIN	4 (6.9)
小 計	24 (41.4)
(2) 免疫学的方法	
(a) RPHA	18 (31.0)
(b) チェックメイトヘモ	0 (0)
(c) ラテックス法(OC-Hem)	16 (27.6)
(d) モノヘム	5 (8.6)
(e) イムノカルト	2 (3.4)
(f) そ の 他	4 (6.9)
小 計	45 (77.6)
検診機関数	58 (100%)

表33 大腸検診の方法(全国, 昭和62年)

Ⅱ. 便潜血 screening の方法(5) (重複回答)

(1) 便塊持参または回収	6 (10.3)
(2) 便塗布試験用紙持参または回収	36 (62.1)
(3) 便塗布試験用紙郵送	9 (15.5)
(4) そ の 他	5 (8.6)
検診機関数	58 (100%)

便の採取と回収方法については、便塗布試験用紙を持参または回収しているところが62.1%で、以下、便塗布試験用紙の郵送が15.5%、便塊持参または回収が10.3%となっている。(表33)。

スクリーニング後の精密検査の方法は、表34に示す通り様々で、まだ標準的な方法が確立、普及していない状態である。何らかの形で注腸X線撮影法を用いているのが、45カ所で77.6%、Total Colonoscopyを用いている機関が21カ所36.2%であった(表34)。

大腸検診の精密検査後の管理は、胃集検における成績と比べておおむね良好である。

4. 大腸検診の成績

昭和62年度に行われた全国の男女合計の受診者総数は、スクリーニング法で251,573名、要精検率いわゆる陽性率は4.1%、大腸癌発見数は328名、0.13%、

表34 大腸検診の方法(全国, 昭和62年)

Ⅱ. Screening 後の精検方法(重複回答)

(1) 注 腸 X 線	18 (31.0)
(2) Total colonoscopy	8 (13.7)
(3) 注腸X線またはTotal colonoscopy	5 (8.6)
(4) 直腸鏡+注腸X線	2 (3.4)
(5) Sigmoidoscopy + 注腸X線	12 (20.7)
(6) Total colonoscopy + 注腸X線	8 (13.7)
(7) そ の 他	10 (17.2)
検診機関数	58 (100%)

表35 大腸検診, 精検以後の管理(全国, 昭和62年)

(1) 精検受診の勧奨をしていない	5 (8.6)
(2) 精検結果の把握をしていない	2 (3.4)
(3) 精検未受診者への勧奨をしていない	13 (22.4)
(4) 発見癌患者に対する治療の勧奨をしない	5 (8.6)
(5) 手術結果の調査をしていない	9 (15.5)
(6) 手術調査をしていない	23 (39.6)
検診機関数	58 (100%)

表36 大腸検診成績(Screening 法, 全国, 男女計, 昭和62年)

	地 域	職 域	その他	計
(1) 受 診 者 数	108,185	60,211	83,177	251,573
(2) 要 精 検 者 数	5,737	1,938	2,603	10,278
(2)÷(1)(%)	(5.3)	(3.2)	(3.1)	(4.1)
(3) 大腸癌患者数	153	74	101	328
(3)÷(1)(%)	(0.14)	(0.12)	(0.12)	(0.13)
(4) 早 期 癌 割 合 (%)	53.6	41.9	57.4	52.1

うち早期大腸癌の割合は52.1%であった(表36)。

年齢が5歳階級別に報告のあったもので、地域、職域、郵送、その他全国男女合計の139,171名について検討してみると、受診者数の年齢分布は50歳代前半にピークがあり、40歳代と50歳代が合わせて約68.3%、また、39歳以下は約10.2%、また70歳以上は3.4%を占める(図23)。

要精検率は加齢とともに上昇している。精検受診率は34歳以下が非常に低い値となっているが、ほかは年齢区分による差はあまりみられない(図24)。

大腸癌発見率も、ほぼ加齢とともに上昇している。しかし、早期大腸癌の割合は、各年齢層での

差はみられない(図25)。

大腸腺腫、および非腫瘍性ポリープの発見率は、腺腫が0.58%、これは大腸癌の5倍で、年齢別頻度は加齢とともに上昇している。非腫瘍性ポリープの発見率は、0.13%で、大腸癌と同じ発見率である。加齢との関係は幾分あるものの、腺腫程明確ではない(図26)。

年齢階級別性別の大腸検診全国集計成績は表37, 38に示す。男性の受診者年齢層のピークは50~54歳、女性も同じである。大腸癌発見率は男性0.16%、女性0.06%である(表37, 38)。

地域住民を対象とした大腸集検の全国集計成績は

図23 大腸検診の年齢階級別成績

(地域、職域、郵送、その他、全国、男女計、昭和62年)

(1) 受診者数の分布 (総数 139,171名)

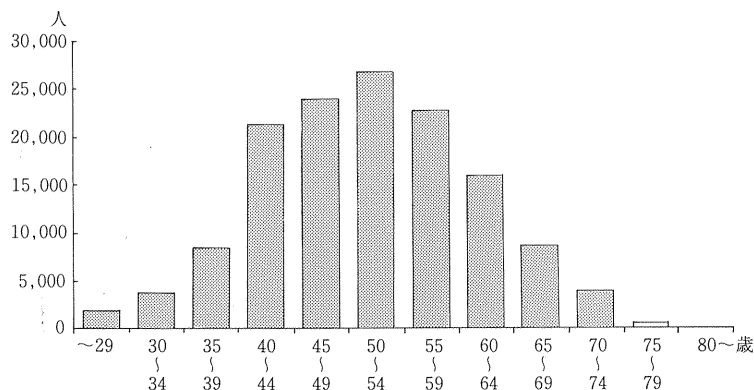


図24 大腸検診の年齢階級別成績

(地域、職域、郵送、その他、全国、男女計、昭和62年)

(2) 要精検率および精検受診率

(--○--) (—●—)

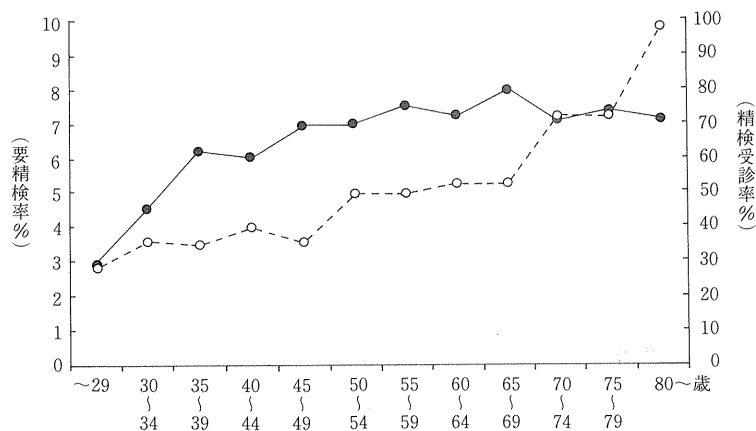


図25 大腸検診の年齢階級別成績

(地域, 職域, 郵送, その他, 全国, 男女計, 昭和62年)

(3) 大腸癌発見率および早期癌割合

(---○---) (—●—)

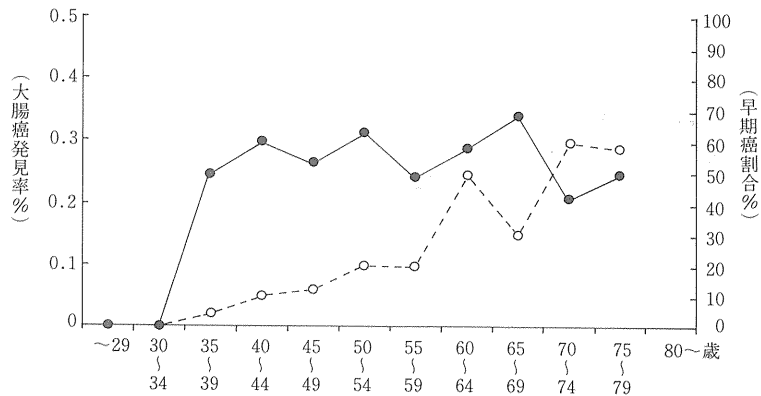


図26 大腸検診の年齢階級別成績

(地域, 職域, 郵送, その他, 全国, 男女計, 昭和62年)

(4) 大腸ポリープ(腺腫)および非腫瘍性ポリープの発見率

(—●—) (---○---)

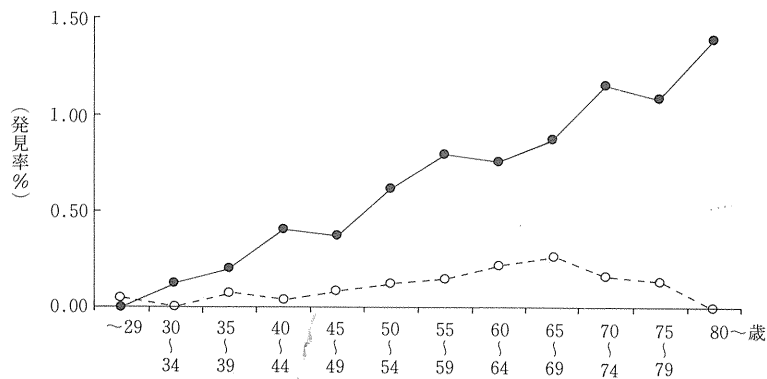


表39, 40に示す。受診者のピークは男性が60~64歳, 女性が50~54歳である。大腸癌発見率は男性0.22%, 女性0.07%である (表39, 40)。

5. 発見大腸癌の追跡調査成績

1) 追跡調査率

昭和62年度の全国集計で把握できた受診者数251,573名から発見された大腸癌は328名, うち深達度や病理組織診断などのデータが得られた数 (個人票の形で送られてきたもの) は183名, 追跡率55.8%である (表41)。

尚, 以下に述べる各表の%は, 該当項目の未記入のものを除いたため合計数が異なり, したがって, 分母の異なる%である。

2) 治療の方法

手術を行ったもの126病変 (64.9%), 内視鏡ポリペクトミーは64病変 (32.9%)であった (表42)。

3) 手術の種類

手術のうち結腸切除術が53例 (49.1%), 直腸切除術が16例 (14.8%), 人口肛門を造設した直腸切除は7例 (6.5%)であった (表43)。

4) 癌病巣の数

単発のもの144例 (90.6%), 2個のもの11例 (6.9%)であった (表44)

5) 占居部位

発見大腸癌の占居部位は184病変 (重複) 中,

最も多いものがSで80 (43.5%), ついでRの56 (30.4%), 以下A 18 (9.8%), T 16 (8.7%), D 12 (6.5%) となっている (表45)。

6) 大腸癌の肉眼分類

早期癌では, IP 型が48病変 (52.2%) で最も多く, II_c型は0であった (表46)。進行癌ではBorrmann II型が60病変 (67.4%) で最も多く, Borrmann IV型は0であった (表47)。

7) 大きさと環周度

直径1.0cm 以下のものの33病変(21.0%), 1.1から2.0cm が43 (27.4%), 2.1から3.0cm が23 (14.6%), 3.1~4.0cm が31 (19.7%) であった(表48)。環周度は1/3以下が74病変(63.2

%) で最も多く, 全周も13病変 (11.1%) を占める (表49)。

8) Stage 分類

Stage I は79例 (51.6%), Stage II 24 (15.7%), Stage III 22例 (14.4%), Stage IV 12 (7.8%) であった (表50)。

9) 深達度分類

169病変中, Ca-in-situ は3病変 (1.8%), m 55 (32.5%), sm 31 (18.3%), 合計52.7%を占める。pm は23病変 (13.6%), ss (al) 33 (19.5%), s (a 2) 13 (7.7%), si (ai) 3 (1.8%) であった (表51)。

10) Dukes 分類

表37 年齢別大腸検診全国集計成績 (62年度) 男性, 地域, 職域, 郵送, その他合計

	総 数	29以下	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65～69	70～74	75～79	80以上	70以上	
1. 集検受診者数	73,879	968	2,125	4,176	12,579	13,557	14,217	11,803	7,638	4,098	2,242	389	87	0	
2. 要 精 検 者 数	3,858	30	87	189	553	546	820	699	472	246	175	32	9	0	
3. 精検受診者数	2,645	8	34	117	334	368	584	521	338	192	119	24	6	0	
精 密 検 査	大腸癌患者数(計)	121	0	0	2	6	11	21	29	32	7	11	2	0	0
	うち早期癌患者数(計)	66	0	0	1	3	6	11	14	19	7	4	1	0	0
	(有茎ポリープ癌患者数)	38	0	0	1	4	4	7	10	9	0	1	2	0	0
	ポリープ(腺腫)	619	0	4	11	70	75	132	144	90	52	33	7	1	0
	非腫瘍性ポリープ	116	1	0	6	6	14	24	23	24	13	4	1	0	0
	大 腸 憩 室	176	0	2	12	28	27	41	29	13	15	8	0	1	0
	潰瘍性大腸炎	3	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	クローン氏病	3	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0
	そ の 他	201	0	2	4	16	23	19	82	28	12	14	1	0	0
	所 見 な し	1,406	7	26	79	208	218	345	214	151	92	49	13	4	0

表38 年齢別大腸検診全国集計成績 (62年度) 女性, 地域, 職域, 郵送, その他合計

		総 数	29以下	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65～69	70～74	75～79	80以上	70以上
1.	集検受診者数	65,292	984	1,647	4,359	8,662	10,548	12,636	11,070	8,406	4,829	1,790	305	56	0
2.	要 精 検 者 数	2,517	24	47	108	295	332	514	456	378	225	115	18	5	0
3.	精検受診者数	1,801	8	27	69	181	243	354	355	277	185	85	13	4	0
精 密 検 査	大腸癌患者数(計)	41	0	0	0	4	4	6	12	8	5	2	0	0	0
	うち早期癌患者数(計)	24	0	0	0	3	2	5	7	4	2	1	0	0	0
	(有茎ポリープ癌患者数)	9	0	0	0	2	1	3	3	0	0	0	0	0	0
	ポリープ(腺腫)	194	0	1	7	16	17	36	42	33	27	14	0	1	0
	非腫瘍性ポリープ	59	0	0	1	2	7	11	12	12	11	3	0	0	0
	大 腸 憩 室	61	0	2	0	7	9	12	9	9	10	3	0	0	0
	潰瘍性大腸炎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	クローン氏病	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	そ の 他	175	0	4	2	28	20	35	34	22	17	11	2	0	0
	所 見 な し	1,270	8	20	59	123	186	254	246	193	115	52	11	3	0

Dukes A は84病変 (60.4%), Dukes B 16 (11.5%), Dukes C は26 (18.7%) であった。

11) 転移の有無

リンパ節転移のあったもの146例中29 (19.9%), ないもの100 (68.5%) であった。遠隔転移のあったもの117例中5 (4.3%), ないもの99例 (84.6%) であった (表53)。

12) 組織型分類

病理組織検査を行った160病変中wellが111 (69.4%) で最も多く、ついでmodeが27 (16.9%), poorが (2.5%) であった (表54)。

以上、大腸検診の全国集計の概要を述べたが、今回の調査は、胃集検の場合と同様、性別、年齢階級

別ならびに検診対象別などの非常に詳しい報告を求めたため、昨年度 (61年) の調査の時の大まかな報告でもよしとして協力をいただいた65検診機関よりむしろ減少した58機関となったことを考慮すると、今回の大腸検診全国受診者総数の約25万人は、かなり少な目の数値と考えられる。また、大腸集検の定義も不明確のままの調査であったため、一部任意検診、人間ドック、郵送法などの数もすべて一緒にしたものであったが、今後は、全体の推移をみながら、明確な定義のもとに全国集計を行う必要があると考えている。しかしながら、今回の全国集計で、性別、年齢別の各種データの傾向もつかむことが可能となったし、また追跡率が不十分ながら個人票の集計が

表39 年齢別大腸集検全国集計成績 (62年度) 男性, 地域

		総 数	29以下	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65～69	70～74	75～79	80以上	70以上
1.	集検受診者数	22,850	191	591	984	2,267	2,574	3,588	3,785	4,425	2,727	1,343	296	79	0
2.	要 精 検 者 数	1,578	18	50	43	138	167	281	303	301	157	92	20	8	0
3.	精検受診者数	1,151	4	10	31	71	143	191	241	228	138	70	18	6	0
精 密 検 査	大腸癌患者数(計)	50	0	0	0	2	3	4	11	18	6	5	1	0	0
	うち早期癌患者数(計)	28	0	0	0	1	2	2	4	11	6	2	0	0	0
	(有茎ポリープ癌患者数)	5	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	2	0	0
	ポリープ(腺腫)	266	0	1	1	19	26	44	58	59	34	18	5	1	0
	非腫瘍性ポリープ	68	0	0	2	1	4	16	12	18	11	4	0	0	0
	大 腸 憩 室	31	0	0	2	1	4	5	6	4	5	3	0	1	0
	潰瘍性大腸炎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	クローン氏病	3	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0
	そ の 他	67	0	1	3	4	7	3	15	16	10	8	0	0	0
	所 見 な し	666	4	8	23	44	99	117	139	113	71	32	12	4	0

表40 年齢別大腸集検全国集計成績 (62年度) 女性, 地域

		総 数	29以下	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65～69	70～74	75～79	80以上	70以上
1. 集検受診者数		42,082	205	898	2,022	4,466	5,867	8,015	7,910	6,841	4,128	1,389	286	55	0
2. 要 精 検 者 数		1,791	7	35	52	184	210	357	331	322	194	79	15	5	0
3. 精検受診者数		1,361	1	18	39	111	169	264	273	246	163	62	11	4	0
精 密 検 査	大腸癌患者数(計)	28	0	0	0	2	3	5	6	5	5	2	0	0	0
	うち早期癌患者数(計)	15	0	0	0	2	1	3	3	3	2	1	0	0	0
	(有茎ポリープ癌患者数)	2	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	ポリープ(腺腫)	125	0	0	4	8	10	22	27	26	18	9	0	1	0
	非腫瘍性ポリープ	50	0	0	0	2	4	8	12	12	10	2	0	0	0
	大 腸 憩 室	39	0	1	0	4	5	4	6	9	8	2	0	0	0
	潰瘍性大腸炎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	クローン氏病	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	そ の 他	129	0	3	2	18	14	26	23	20	14	8	1	0	0
	所 見 な し	989	1	14	33	76	133	199	199	174	108	39	10	3	0

表41 検診発見大腸癌の追跡調査（男女合計，62年度）

発見大腸癌	328名
追跡調査患者	183名
追跡率	55.8%
初回受診者	112名 (61.2%)
1年前々	35名 (19.1%)
2年前々	5名 (2.7%)
3年前々	2名 (1.1%)
4年以上前々	3名 (1.6%)
不明または無回答	26名 (14.2%)
計	183名 (100%)

表42 治療の方法（男女合計，重複，62年度）

手術	126 (64.9)
内視鏡ポリペクトミー	64 (32.9)
その他	1 (0.5)
不明	1 (0.5)
計	192 (100%)

表43 手術の種類（男女合計，62年度）

結腸切除	53 (49.1)
直腸切除	16 (14.8)
直腸切断 (人工肛門造設)	7 (6.5)
その他	6 (5.6)
不明	26 (24.1)
計	108 (100%)

表44 癌病巣の数（男女合計，62年度）

単発	144 (90.6)
2個	11 (6.9)
3個	0
4個以上	1 (0.6)
不明	3 (1.9)
計	159 (100%)

ら，多くの貴重なデータがでてきたものと考えている。

III 食道集検および肝胆膵集検全国集計

1. 食道集検

食道集検は全国で47の機関で行われており，受診者総数は263,238名である。また，発見食道癌は22名，

表45 癌病巣の部位（男女合計，62年度）

部位	例数	
P	1	(0.5)
R	56	(30.4)
S	80	(43.5)
D	12	(6.5)
T	16	(8.7)
A	18	(9.8)
C	1	(0.5)
計	184	(100%)

表46 早期大腸癌の肉眼的形態分類（男女合計，62年度）

形態分類	数	
I P	48	(52.2)
I s	16	(17.4)
II a	8	(8.7)
II a + II c	3	(3.3)
II c	0	
その他	9	(9.8)
不明	8	(8.7)
計	92	(100%)

表47 進行大腸癌の肉眼的形態分類（男女合計，62年度）

Borrmann I	10	(11.2)
Borrmann II	60	(67.4)
Borrmann III	13	(14.6)
Borrmann IV	0	(0)
不明	6	(6.7)
計	89	(100%)

表48 大腸癌の大きさ（直径）（男女合計，62年度）

大きさ (cm)	例数	
～ 1.0	33	(21.0)
1.1 ～ 2.0	43	(27.4)
2.1 ～ 3.0	23	(14.6)
3.1 ～ 4.0	31	(19.7)
4.1 ～ 5.0	13	(8.3)
5.1 ～ 6.0	7	(4.5)
6.1 ～	7	(4.5)
計	157	(100%)

表49 大腸癌の環周度（男女合計，62年度）

1 / 3 以下	74 (63.2)
1 / 2 以下	14 (11.9)
3 / 4 以下	9 (7.7)
3 / 4 以上	7 (5.9)
全周	13 (11.1)
計	117 (100%)

表50 大腸癌の Stage 分類（男女合計，62年度）

Stage I	79 (51.6)
Stage II	24 (15.7)
Stage III	22 (14.4)
Stage IV	12 (7.8)
分類不能	2 (1.3)
不明	14 (9.2)
計	153 (100%)

表51 大腸癌の深達度（男女合計，62年度）

Ca-in-situ	3 (1.8)	} (52.7)
m	55 (32.5)	
s m	31 (18.3)	
p m	23 (13.6)	
s s (a1)	33 (19.5)	
s (a2)	13 (7.7)	
s i (ai)	3 (1.8)	
不明	8 (4.7)	
計	169 (100%)	

表52 大腸癌の Dukes 分類（男女合計，62年度）

Dukes A	84 (60.4)
Dukes B	16 (11.5)
Dukes C	26 (18.7)
不明	13 (9.4)
計	139 (100%)

表53 転移の有無（男女合計，62年度）

	a. リンパ節転移	b. 遠隔転移
なし	100 (68.5)	99 (84.6)
あり	29 (19.9)	5 (4.3)
不明	17 (11.6)	13 (11.1)
計	146 (100%)	117 (100%)

表54 大腸癌の組織型分類（男女合計，62年度）

well	111 (69.4)
moderate	27 (16.9)
poor	4 (2.5)
undiff.	0 (0)
muci.	2 (1.3)
signet	2 (1.3)
特殊型	2 (1.3)
不明	12 (7.5)
計	160 (100%)

表55 食道集検の全国集計成績（62年度）

受診者総数	263,238人
男	172,998人 (65.7%)
女	87,188人 (33.1%)
性別不明	3,052人 (1.2%)
発見疾患と発見率	
食道癌	22名 (0.01%)
食道ポリープ	119名 (0.05%)
食道潰瘍またはびらん	31名 (0.01%)
静脈りゅう	49名 (0.02%)
その他の疾患	1,155名 (0.44%)

表56 肝胆膵集検の全国集計成績（62年度）

受診者総数	281,139人
男	149,261名 (53.1%)
女	106,486名 (37.9%)
性別不明	25,392人 (9.0%)
発見疾患と発見率	
肝臓(原発性)	65名 (0.02%)
肝臓(転移性)	4名 (0.001%)
肝硬変症	136名 (0.05%)
脂肪肝	12,328名 (4.4%)
肝のうほう	8,827名 (3.1%)
胆嚢癌	26名 (0.01%)
胆嚢ポリープ	8,254名 (2.9%)
胆石症	7,109名 (2.5%)
すい臓癌	5名 (0.002%)
すい臓症	20名 (0.01%)
すいのうほう	129名 (0.05%)
その他	11,238名 (4.0%)

0.01%, 食道ポリープ119名0.053%, 食道潰瘍またはびらんが31名0.01%, 静脈瘤は49名0.02%である(表55)。

2. 肝胆膵集検

肝胆膵集検は、全国60の機関で実施している。受診者総数は、281,139人で、うち性別不明例が9.0%である。発見疾患は、原発性肝癌65名、0.02%, 肝硬変136名、0.05%, その他、胆嚢癌0.01%, 膵癌0.002%, 脂肪肝4.4%, 肝のうほう3.1%, 胆石症2.5%などが発見されている(表56)。

IV まとめ

昭和62年度の消化器集検全国集計について要約すると以下ようになる。

(1) 胃集検については、受診者総数が515万人で、前年度比+2.4%, 約12万人の増加、要精検率は13.9

%, 精検受診率75.5%, 発見胃癌は6,661例であった。早期癌の割合は、発見胃癌のうち52.1%, 切除胃癌では、60.7%であった。地域集検は、全体の約63%の326万人であった。学会の制度として発足した認定医のいる検診機関は195カ所、55.2%であった。

(2) 大腸検診は全国で約25万人、大腸癌発見率は0.13%, 早期癌の割合52.1%であった。検診方法はスクリーニング法では便潜血を用いているところが約95%, うち免疫法が77.6%を占めていた。

(3) 胃集検大腸集検以外の消化器集検についても前年度にひきつづいて同様の調査をおこなったが、特に肝胆膵集検の増加傾向がみられた。

なお、アンケートの回答をおよせいただいた全国の検診機関、および学会の役職員や事務局の方々、各県の全国集計協力委員、認定医の先生方の絶大な協力に対し厚く御礼を申し上げます。